

芦津丈夫

ゲーテの
自然体験

ゲーテの自然体験

芦津丈夫

Libro

ゲーテの自然体験

あしづたけお
芦津丈夫

1930年 和歌山県に生まれる。

1953年 京都大学文学部卒業。

専攻 ドイツ文学。

現在 京都大学教授。

著 書 『フルトヴェングラー』(共著) 岩波新書。

訳 書 ゲーテ『芸術論』(潮出版社)

フルトヴェングラー『音と言葉』、『音楽ノート』(白水社)

シュタイガー『音楽と文学』(白水社)

キルケゴール『愛のわざ』(共訳、白水社)、その他

1988年2月25日 初版第1刷発行

著 者 芦津 丈夫

発行者 小川 道明

定 価 1900円

株式会社 リプロポート

〒171 東京都豊島区南池袋1-16-22
西武流通事務館

電 話 東京 03 (983) 6191

© 1988 Printed in Japan

装幀/加藤光太郎

印刷・装幀印刷 製本・大口製本

ISBN 4-8457-0326-2 C0098 ㊞ 1900 E

ゲーテの自然体験
もくじ

序論 ゲーテと現代 7

第一章 臍の緒——『湖上にて』初稿をめぐって 31

第二章 創造と破壊としての自然 61

第三章 永遠に反芻する怪物 91

第四章 自然詩——『旅人の夜の歌』をめぐって 121

第五章 ラオコオン群像 155

第六章 ゲーテと音楽——眼と耳 189

第七章 大地の呼吸——ゲーテのアンテュース性 213

第八章 永劫回帰——ファウストの海との戦い 253

あとがき 293

装幀 加藤光太郎

ゲーテの自然体験

序論　ゲーテと現代

一八二四年十月二日はドイツ文学、とりわけドイツの抒情詩を愛する者にとっては忘れがたい日である。この日、若き詩人ハインリヒ・ハイネがヴァイマルの町にゲーテを訪問したのである。当時ヴァイマルのフラウエンプランにあるゲーテの家は、さながら文化人、芸術家たちの聖なる巡礼の地という観を呈していた。このときハイネは二十六歳、ゲーテはすでに七十五歳を迎えていた。ゲーテは日記に「ゲッティンゲンからのハイネ、昼食をとみにする」とだけ簡潔に書きしるしている。ところでハイネにとって、この日の出来事は何を意味したのか。ハイネ独特の毒舌とユーモアにとむ文章、かなりの誇張と少なからぬ虚構をまじえた彼の記述ではあるが、『ロマン派』（一八三三年）の第一巻には次のような記述が残されている。

一文学青年、ゲッティンゲン大学の一学生にすぎなかったハイネがこの日に対面したのは、まさに「偉大なるジュピター」であった。ゲーテの容姿はみごとな調和をたたえ、古代人のような逞しさを見せていた。ゲーテの眼は高齡にもかかわらず若々しく、崇高で、神の瞳のように安らかであった。彼が手を差しのべるとき、そこには、あたかも天空の星辰の運行をも定めるような高貴な指が見られた。いま自分の眼前に坐するのは神々の父、あのオリュンポス山に君臨する偉大なるジュピターではなからうか、とハイネは考える。

「思わず私は、くちばしから稲妻を発する鷲がその傍にいないか」とゲーテの脇の方に目をやった。すんでのところで私はギリシア語を話しかけたが、彼がドイツ語を理解することに気づき、ドイツ語でイエーナからヴァイマルに来る途中の杏あんずは非常においしかったと彼に話した。」かねがね才氣煥発なハイネは、ゲーテに出会ったときに話するために崇高で深遠な事柄をもあれこれと準備していた。しかし現実にはゲーテと対面した瞬間、その威力に完全に圧倒されて、ようやく「途中で食べた杏がおいしかった」とだけ話せたと言うのである。この体験談がどこまで信用できるかは別として、以上の記述は、ゲーテの途方もなく巨大な存在が同時代人のハイネにとって意味したところを端的に物語る貴重な資料であると言えよう。

さて、ハイネによって神ジュピターに譬えられたゲーテは、当時より今日にいたるまで、その「偉大さ」を保持しつつ世界に絶大な影響をおよぼし続けてきた。ドイツ最大の詩人、あるいはダンテ、シェイクスピアとならぶヨーロッパの文豪などという表現によって、今さらその

「偉大さ」を証明する必要はなからう。この「偉大なるジュピター」は度かさなる病患、さまざまな精神上の危機をも乗りこえ、人類への遺産ともいふべき『ファウスト』を完成して、十二年にわたる輝かしい人間の一生を全うした。ゲーテが詩人としてのみならず政治家、自然研究家、さらには画家としても活躍し、まさにレオナルド・ダ・ヴィンチにも比すべき多角的な天才であったことも、知る人ぞ知るところであろう。

だが本章では「ゲーテと現代」に焦点をしぼり、ゲーテの偉大さが現代という時代に何を語りうるかという問題を論じることにする。そもそも「現代」とは、いつに始まるものであろうか。ここでは私自身の理解、おそらく一般にも通用するであろう理解にもとづいて、あえて第二次大戦終結の年、すなわち一九四五年を「現代」の開始の年とみなし、現代におけるゲーテ受容の現実を考察することにした。

十八世紀以降のゲーテ像にも、時代の移り変わりとともにさまざまな変貌があったことは言うまでもない。世界史は人類の進歩とともに時おり書き改める必要があるという意味のことをゲーテ自身語っているが、同じことがゲーテの歴史、つまりゲーテ理解の歴史についても言いうるはずである。少なくとも一九四五年という年がゲーテ研究、ゲーテ評伝のみならず、ひろくゲーテ理解一般にとって大きな変革の年となったことは否定しがたい。この大きな変革を象徴的に示すものとして、一九四七年八月二十八日、ゲーテ生誕の日に哲学者カール・ヤスパースがゲーテ賞受賞にあたりフランクフルトで行った講演『我々の未来とゲーテ』のことが思い

起こされる。⁽¹⁾ 一九四七年夏といえ、まだ敗戦直後で、敗戦の衝撃によるドイツ国民の心の傷痕もなまなましく、首都ベルリンが今なお瓦礫の山に埋まっていた時代である。講演は、ドイツの未曾有の危機に直面した一哲学者ヤスパースの、悲惨な現実に対する痛切な訴えによって始められる。ドイツは、近代の列強として一等国を目ざしてきたヨーロッパの国家群から完全に脱落してしまった。ドイツの現状は、あの「バビロン捕囚」によってユダヤ人の追いこまれた絶望的な状況にも比せられるものだというのである。

この深刻な危機意識に立つヤスパースが、ここで今いちど、長らくドイツ精神の大支柱をなしてきた詩人ゲーテを根底より問いなおし、なんらかの新しい再出発の契機をそこに見いだしたいと願ったのも無理はない。それは、いわゆる「ゲーテ神話」の崩壊を認識した上での痛切な要請であった。ゲーテは神でもなければ超人でもない。今や人間ゲーテの「限界」を見きわめた上で新しくゲーテを理解し、「いま」と「ここ」に立って誠実にゲーテに問いかけることが必要であると、この実存主義の哲学者は語っている。そしてこの大胆な発言は、当時のドイツ思想界、文芸界に絶大な反響を呼び起こしたのである。

これまでゲーテはあまりにも過大評価され、神格化されすぎてきたのではないか。この問いを發するヤスパースの念頭には、一九一〇年代から三〇年代にかけて熱烈なゲーテ崇拜者たちによって築きあげられた、あの光輝燦然たるゲーテ像が彷彿としていたにちがいない。たとえば、哲学者ゲオルク・ジンメルがその著『ゲーテ』（一九一三年）において追求したのは、人間

ゲーテというよりも、ゲーテ的存在の意味であり、「理念ゲーテ」であった。自己の生涯と創作を通して「生々發展する刻印された形式」をあざやかに実現した稀有の天才こそゲーテであるとされる。ハイデルベルクの文学史家フリードリヒ・グンドルフは、まぎれもなく「ゲーテ神話」の創造者のひとりであった。彼はニーチェから詩人シュテファン・ゲオルゲにいたる精神主義の系譜に立って、反歴史主義の立場を表明した人である。その一世を風靡した書物『ゲーテ』（一九一六年）には、明らかにニーチェやゲオルゲの影響によると思われる神話形成の意図がうかがわれる。彼によれば、ゲーテとは運命、創造力、人格という三つの要因をみごとに統合した唯一のドイツ人、近代における類いまれな「古典的人間」を意味していた。ゲーテにあつては作品そのものが生涯であるとみなすグンドルフは、ゲーテの文学作品をあざやかに分析、解明しながら、そこに偉大な人間形成のプロセスを読みとり、また原体験と教養体験との緊密な結合体をゲーテに指摘することによって、同時代のベルトラムのニーチェ伝にも匹敵する画期的なゲーテ神話の形成をなしたたのである。文学史家ヘルマン・A・コルフも大著『ゲーテ時代の精神』（四巻）の第一巻をすでに一九二三年には公表しているが、彼はシュトゥルム・ウント・ドラング、古典主義、ロマン主義の三時期にまたがる「ゲーテ時代」を有機的統一体として捉え、そこに反啓蒙主義的な非合理精神より出発した輝かしいドイツ理想主義の開花を指摘している。その頂点にゲーテが置かれていたことは言うまでもない。

こうした絶対的なゲーテ崇拜の確立していた大戦前のドイツ精神界を思い浮かべてみると、

ゲーテ神話の崩壊を告げたヤスパーズの発言がいかに革新的なものであり、いかに当時のドイツ知識人にとって衝撃的なものであったかは容易に想像されよう。それは一ドイツ人の、敗戦の悲惨な現実を前にしての肺腑をえぐるような心情吐露であると同時に、ドイツ人としての痛切な自己批判でもあった。ヤスパーズはゲーテの限界を語るのみか、「ゲーテに反抗する権利」という大それた言葉まで口にしてゐる。ゲーテへの懷疑、反抗とは、ゲーテを頂点としてきたドイツ理想主義精神への懷疑、反抗を意味するものにほかならない。彼のゲーテ限界説には、徹底的な自己批判を通して未来における新しい再生を願うドイツ知識人の悲壮な決意が秘められていたのである。

ところでヤスパーズの言う「ゲーテの限界」とは具体的に何を意味するものであったのか。まず彼はゲーテの近代自然科学についての無理解をあげ、詩人がこの台頭する新しい世界に対して示した拒否的な態度のうちに一つの限界を見ている。ゲーテの創造的な自然把握、また彼が形態学や色彩論の分野において達成した自然研究の成果は、今日なお不滅の価値を有している。だが彼はおよそニュートンの名で代表される一切のもの、すなわち近代科学を敵視し、これに徹底的な拒否を示した。それゆえゲーテの自然認識は、近代の科学思考となんら相容れるところを持たないとする。老ゲーテの近代技術についての発言、あるいは『ファウスト』第二部に見られる干拓事業の場面などを取りあげて、彼が来るべき技術時代を肯定したなどと考えてるのは大きな誤謬である。近代自然科学とは、あくまでもゲーテの忌み嫌った抽象化の上に

成り立つ。ゲーテの自然認識は現代の科学・技術文明とはまったく異質のものであり、今日になんら寄与するところはないと言う。

第二にヤスパースはゲーテのいわゆる「調和的根本解釈」を取りあげ、悲劇性や深淵的体験に対するゲーテの自己防御的な態度を問題としている。彼は世界や人間存在にひそむ虚無の深淵と無縁であったわけではない。しかしひとたびこのような危機に近づくとき、彼はとかく自己防御的行為もしくは緩和的解釈をもってこれにのぞみ、自己の破滅を回避し、世界の調和を選びがちであった。今まさに人々は「深淵」との対決を迫られ、ゲーテよりもむしろ聖書、アイスキュロス、シェイクスピアの世界に強く惹きつけられている。このような状況下で、はたしてゲーテの調和的人生観がどこまで現代人に訴えることができるかと問いつめる。

最後にヤスパースは「最も慎重に論ずべきゲーテの「限界」にふれるとしてゲーテの道徳的な側面に言及し、恋愛における優柔不断や不誠実さなど、古くからゲーテに向けられてきた非難を取りあげている。この非難に対し、ヤスパースは詩人のフォン・シュタイン夫人への「感動的な誠実さ」などをあげて一応ゲーテ擁護の立場にまわっているが、これに続いてキルケゴールの実存主義的な立場からの鋭いゲーテ批判を援用していることを見おとしてはならない。恋愛において誘惑者となる決意も、また結婚への決意も固めようとしないうちの第三の態度がある。その男は惚れこみ、恋の続くかぎり恋に生き、やがて恋を中止して、すべてを忘却する。この「曖昧な存在者」が自叙伝『詩と真実』にうかがわれるゲーテにほかならない。この中途半端

な生き方が、彼の詩作の態度についても指摘される。ある体験が深刻なものとなり、自分を圧倒しそうになるとき、彼はこの体験を「詩作する」(dichten)、つまりそれを凝固させる (dicht machen) ことによって自己自身より遠ざけ、この危機を回避する。ゲーテに欠如するものは、要するに真剣な実在を求めて事態と対決し、「あれかこれか」を決意する。パトスではなからうか。——これはキルケゴールが『人生行路の諸段階』の第二部「結婚についての諸想」で語ったところであるが、この人間としての真摯な生き方を問いつめるゲーテ批判をヤスパースは持ちだすのである。

ヤスパースの指摘したゲーテの限界とは、近代自然科学に対する拒否的な姿勢、悲劇的・深淵的な体験の回避、倫理的・実存的なパトスの欠如、この三点であった。以上のヤスパースの革新的なゲーテ限界説は、その発言の真実性や歴史的意義は充分に評価されるにせよ、私にはどうしても容認しがたい、即座に反論したくなる二、三の点を残している。この反論はすべて以下の論述に委ねることとするが、次の一点だけはここで明確にしておきたい。それは、たとえゲーテが調和を至上のものとする人間であったにせよ、決して安易な調和化、深淵の無責任な回避を選びとる人間ではなかったという事実である。少なくともゲーテの自然体験については、「深淵」回避を語ることは断じて許されないであらう。

しかしながら「ゲーテへの反抗」はなにも戦後のヤスパースをもって嚆矢とするものではない。ゲーテへの懷疑、批判、反抗は、すでにキルケゴールの批判にも見られるように十九世紀、